東京ジャーミイ金曜日のホタバ

2009 年 1 月 16 日

ヒクマ（英知）

親愛なるムスリムの皆様。崇高なる神はクルアーンで次のように仰せられておられます。「かれは御心に適う者に、英知を授けられる。英知を授けられた者は、本当に多分の良いものを授けられた者である。だが思慮ある者の外は、誰も反省しない。」（雌牛章第２６９節）今日のフトバでは、今お読みしたクルアーンの言葉からスタートして、英知の本質について言及したいと思います。

クルアーンでも明らかに示されているように、アッラーは望まれる者に英知を授けられます。授けることは一切の条件や制限をうけません。英知は現世と来世の善のために受けられます。英知を伴わない善は、時には存在し、時には存在しないものです。このことも、正しい理性を持ちしっかりした本質を持つ人々以外は考えないのです。人間は直接クルアーンの言葉で指摘されても、それでも理性をもたないのです。知性を働かせることなくして、神の英知から益を授かることはできません。つまし、英知を授かるためには与えるという行為だけでは不十分で、それを受け取ることもまた必要なのです。英知を受ける条件は理性と正しい選択で、最初のステップは熟考です。アッラーが与えてくださった理性を性欲やシャイターンの疑念に費やしてしまう人は、自らの内面世界のインスピレーションについても、外的世界で起こる警告を含んだ出来事についても、考えて何かを理解し把握することができないのです。

親愛なるムスリムの皆様。英知、「ヒクマ」という語は、判断、統治、そして保全といった意味に関わるものとして様々な意味で用いられるものであり、そこでの用法に応じて理解される必要があります。本来は、悪を取り除き、善を手にするという意味を持つ言葉であり、判断や統治という言葉はそこから派生したものです。悪を取り除き善を手にするという行為があるところには、英知も存在するのです。学者たちはこの言葉を次のように解釈しています。

１　ヒクマは、言葉と行動において正しさを守ることです。どのようなことであれ、心を通し、舌によって言葉とし、「これはこうである」といい、そしてそのように行なわなければなりません。行なった行為もそれに適うものでなければならないのです。これが一つのヒクマです。

２　ヒクマは、知識であり、行為でもあります。知ること、そしてその知識によって行動することです。この二つを両立させることができない人は、ヒクマ（英知）を伴った人と呼ぶことができないのです。

３　ヒクマは、存在の本質における意味を知ることです。言い換えるなら、存在の内面における真実と最も影響力のある特性を知ること、その特性を様々な目的のためにどのように生かすことができるかを知ることです。つまり、被造物の間の原因と結果のつながり、存在の本質と目的を把握することです。医師という意味で「ヘキム」という言葉が使われることは、病気と快復との間のつながりを見つけ、それに応じて薬を処方することに由来しているに違いありません。

４　ヒクマは、被造物の秩序において、全てをふさわしい場所に置くことです。この定義は、被造物の世界における様々な被造物の場とその価値を理解する必要があることを示しているのです。従って、順序や秩序が考慮されることなくなされた振舞いは、英知という概念から外れたものとなります。

５　ヒクマは、政治において人間の力の及ぶ限り、崇高なる創造主に似ようとすることです。これは、知識を無知から、行為を暴挙や不正から、もてなしや恵みをけちであることから、寛容を嫌気から区別することによって可能となるのです。この定義は、ヒクマという語の「統治」という意味とのつながりをより重視したものです。

６　ヒクマは、アッラーの美徳によって徳を備えることです。実際あるハディースでは、「アッラーの徳によって徳を備えなさい」と命じられているのです。

ヒクマとは、いかに素晴らしい特性であり、資産であることでしょう。神が、私たちをヒクマを求めるしもべとしてくださいますよう。